

# エジプト学研究第 21 号 2015 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.21, 2015

## 目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
2014 年 太陽の船プロジェクト 活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	5
第 7 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報		
近藤二郎・吉村作治・河合 望・菊地敬夫・柏木裕之・竹野内恵太・福田莉紗		19
〈特別寄稿論文〉		
年輪年代学とエジプト学	ピアース ポール クリースマン・ジェフリー S ディーン	45
〈研究ノート〉		
中王国時代の装身具利用からみた埋葬習慣の地域性	山崎世理愛	59
〈修士・卒業論文概要〉		
エジプト先王朝時代における石製品研究		
—その生産と流通からみた地域統合過程の変遷を中心に—	竹野内恵太	79
「古代テーベとそのネクロポリス (The Ancient Thebes and its Necropolis)」における		
遺跡の保存と活用	福田莉紗	87
古代エジプト古王国時代から第一中間期における王権観	松永修平	96
〈活動報告〉		
2014 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告		103
2014 年 エジプト調査概要		107
〈編集後記〉	近藤二郎	113

# The Journal of Egyptian Studies Vol.21, 2015

## CONTENTS

Preface .....	Sakuji YOSHIMURA.....	3
Field Reports		
Report of the Activity in 2014, Project of the Solar Boat .....	Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA.....	5
Preliminary Report on the Seventh Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition .....	Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Nozomu KAWAI, Takao KIKUCHI, Hiroyuki KASHIWAGI, Keita TAKENOUCI and Risa FUKUDA.....	19
Articles		
Dendrochronology and Egyptology .....	Pearce Paul CREASMAN and Jeffrey S. DEAN.....	45
Regional Variability of Personal Adornments and Burial Customs in the Middle Kingdom .....	Seria YAMAZAKI.....	59
Summary of the Recent Undergraduate Theses.....		79
Activities of the Society, 2014-15.....		103
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2014.....		107
Editor's Postscript.....	Jiro KONDO.....	113

# エジプト先王朝時代における石製品研究 —その生産と流通からみた地域統合過程の変遷を中心に—

竹野内 恵太\*

## 1. はじめに

エジプト先王朝時代では、ナイル川下流域と東西砂漠地帯から産出する種々の石材を用いて、石製容器や泥岩製パレット、石製歯牙形製品を典型例として様々な石製品が製作された。しかし、その生産や流通について具体的な像は提示されていない。よって修士論文の目的は、石製品の分類や編年、分布論といった基礎研究の更新を最新の土器編年体系によって図るとともに、その生産体制および流通システムの変遷過程について諸分析を通じて捉える点にあった。また、各種石製品は、土器や石器のように各遺跡における在地生産ではなく、大規模遺跡における集約的な生産が想定されている。且つ素材である岩石は産地が局在することもあり、石製品の分布状況は地域間の物資の分配と供給という観点から考察でき、当該期の地域間交流を明らかにできると考える。そのため、各種石製品を個別に焦点を当てるといよりも、素材を共有する製品を総体的に分析することで、先王朝社会における地域間の石材の利用形態と流通をより具体的に理解できると考えた。

さらに、石製品の生産と流通の時期的変化は、その背景にある地域統合という社会変化と併せて考えるべきである。エジプト先王朝時代に関する考古学的諸研究は、初期国家の形成過程に沿った物質文化の変容を主たる関心として進められてきた。この物質文化の変

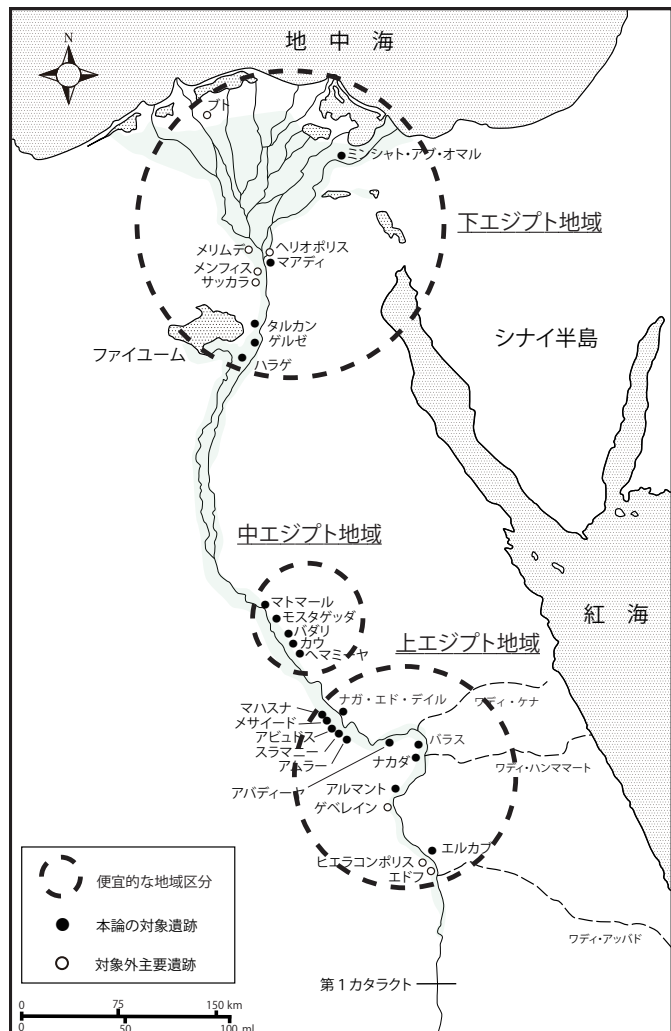


図1 本論の対象遺跡と地域区分

\* 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程

容は、土器や石器の地域色が徐々に薄らいでいく地域統合過程に代表される。他方で、このような地域性消失の背景には、人間集団の移動・交流を介した物資や情報の流入と受容が各地域間において必然的に存在した。地域統合過程の研究は、こうした動的な視点から捉え直し、議論する余地が大いにある。

よって、修士論文では、①石製品の生産体制と流通形態の変遷を素描し、②先王朝時代における地域統合過程について再考することを目的とした。研究手順としては、A. 最新の土器編年を採用し、各種石製品の分類と編年を再構築する。そのうえで、B. 各種石製品の分布状況を把握し、遺跡・地域間の生産体制とその経時性について言及する。その際、出土点数が安定している石製容器と泥岩製パレット、石製符形製品に分析対象は限定した。さらに、C. 産地が限定され、且つ全遺跡で一定量出土する泥岩製パレットを対象として、考古学における一般的な交換分析を援用する。また、東部砂漠産の石材を用いたメイスヘッドや球形製品、棒状製品といった石製品の分布状況も加味し、石製品の流通形態について分析を行った。そして、D. これまでの分析結果を総合させて、石製品の生産と流通の変遷について考察し、地域統合過程との並行関係を論じた。

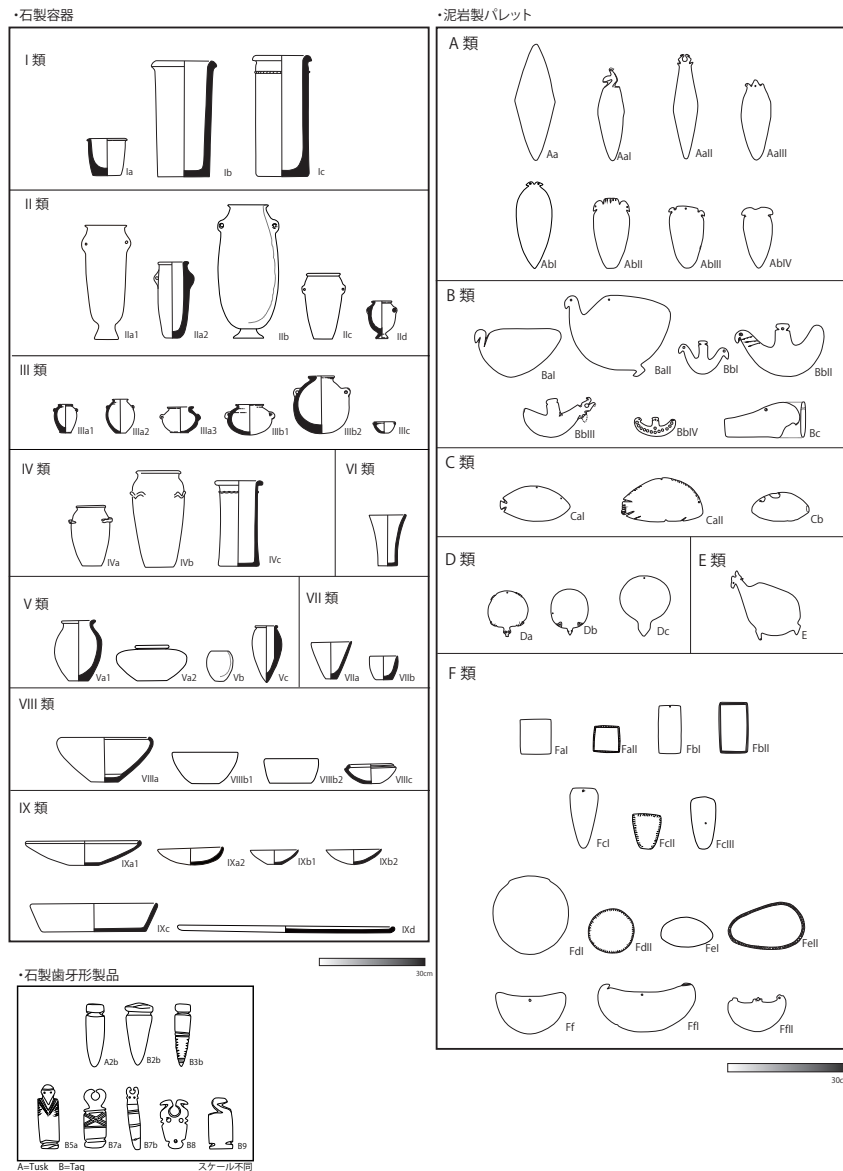


図2 各石製品の器形・形態分類

## 2. 各種石製品の分類と編年

本論で主として取り扱う石製品は、全遺跡から一定量の出土が確認される石製容器、泥岩製パレット、石製歯牙形製品である(図2)。先王朝時代の編年研究では、副葬品のアセンブリッジ内で共伴する土器との対応によって、他遺物の編年が組まれている。本論では最新の土器編年であるヘンドリックス編年(Hendricks 1996, 2006)に基づき、IA-B期、IIA期、IIB期、IIC器、IID期、IIIA期、IIIB期の7時期に設定し、各種石製品の編年を設定した。その際、ヘンドリックス編年を適用できる全個体を各遺跡(図1)から集成し、新たに体系的な器形・形態分類を構築した。石製歯牙形製品については、ヘンドリックスらによる包括的な集成研究に沿って分類した(Hendricks and Eyckerman 2011)。さらに、石材構成という点からも編年を組んだ。その結果、概ね各種石製品は、IA-B期、IC期、IIA-B期、IIC-D期、IIIA-B期の5時期に区分可能であることがわかった。この5時期区分に基づき、それぞれの石製品の分布状況を分析する。

## 3. 各種石製品の分布状況

### 3-1. 石製容器

まず、IC期では、Ia類とIII類を主体とし、器形から見ると遺跡間での差異は認められない。全器種構成がナカダ遺跡で出土している一方で、他遺跡では散発的である。続くIIA-B期でも、遺跡間で器形における差異は明確でない。しかし、ナカダ遺跡やアムラ遺跡、バダリ遺跡、マトマール遺跡では、それぞれ出土個体数は1点ながらも、それぞれの遺跡でしか出土しない器形が現れる。

続くIIC-D期になると、上下エジプト間における器形の差異が現れる。上エジプト地域内においてはIII類の管状把手付き壺を中心とした様相であるが、下エジプト地域の2遺跡では、それに加え、鉢あるいは杯の出土が目立つ。すなわち、当該期の分布状況は上下エジプト地域間で二極構造的な様相を呈する。

IIIA-B期では、上エジプト地域では、円筒形壺と管状把手付き壺が主体を占めるが、下エジプト地域では後者についてはほぼ出土せず、円筒形壺と杯・鉢・皿であるVI類・VIII類・IX類を中心とする。一方で、上エジプト地域内部では、III類の管状把手壺を未だ堅持しており、IIA-B期以来の上エジプト地域の伝統性が窺われる。一方で、中エジプト地域におけるヘマミーヤ遺跡やバダリ遺跡、モスタゲッタ遺跡の3遺跡では、III類の管状把手付き壺に加えて、杯・鉢・皿の指向性が強い。つまりIIIA-B期では、上エジプト地域内のナカダ地域からアビュドス地域とバダリ地域、下エジプト地域の3極化した構造をなし、地理的なグラデーションを示す。バダリ地域は2地域間の中間的様相を呈すると言える。

### 3-2. 泥岩製パレット

IC期ではナカダ遺跡のF類の排他性、アムラ遺跡のBbI類とBbIII類の排他性から、これら2遺跡間で地域的差異がある。一方で、バダリ地域であるバダリ遺跡やマトマール遺跡、カウ遺跡では、ナカダ遺跡と形態が類似する。しかし、IIA-B期になると、アムラ遺跡において固有であったBbI類・BbIII類がバダリ地域でのみ認められるようになる。翻って、アムラ遺跡では、ナカダ遺跡との類似を示すようになる。IIC-D期には、上エジプト地域内で大きな差異はなくなる一方で、ナカダ遺跡におけるF類の排他性はIIC-D期まで継続する様相が窺える。IIIA-B期には、出土の中心が下エジプト地域に移り、タルカン遺跡とミンシャト遺跡で大量に出土するようになる。当該期になると、タルカン遺跡で出土している形態の組成がほぼ全ての遺跡をカバーし、それに伴って地域間で差異は消失する。

### 3-3. 石製歯牙形製品

まず、IC期の段階では、3遺跡間で形態と石材ともに明確な差異が認められた。IIA-B期でも、全体の出土個体数が増加するに伴い、形態の構成において4遺跡間の差異がより広がる傾向にある。石材構成も、ナカダ遺跡が泥岩製の歯牙形製品を排他的に保有する様相は変わらず、IC期に見られた遺跡間の差異をより強調していた結果となっている。しかし、IIC-D期になると、アムラ遺跡で排他的であった形態がナカダ遺跡でも認められるようになる。

### 3-4. 小結

以上の石製品の地域性をまとめると、石製容器の分布からはIIA-B期まで上エジプト内で明確な地域区分はできない。しかし、IIC-D期に入ると、石製容器と泥岩製パレットともに上下エジプト地域間で大きな差異が導き出された。当該期になると、上エジプト地域ではすでに地域差はほぼ消失している。これは石製歯牙形製品のAb2類がナカダ遺跡から出土するようになることからわかる。一方、上下エジプト間については、石製容器と泥岩製パレットともに排他的な出土の様相にある。国家の形成段階であるIIIA-B期に入っても、石製容器からは上エジプト地域のみIII類が出土するように、上下エジプト地域間で差異は消失しない。

また、泥岩製パレットと石製歯牙形製品間には地域的な視点に立脚しても共通項がある。泥岩製パレットや泥岩製の歯牙形製品の分布域は、アビュドス地域とナカダ地域にほぼ固まる。特に、泥岩製パレットのAaII類やBbII類、E類に付属する幾何学状の意匠と共通する属性をもつ泥岩製歯牙形製品のB8類およびB9類は、ナカダ地域圏内のみ見られる。

以上、石製品の地域分布について分析を行ってきた。本論の分析結果からは、バダリ地域という小規模遺跡からなる地域では出土量が圧倒的に少なく、且つ石材供給地に地理的に近い遺跡から多数の石製容器が出土することを再確認した。この結果は、ナカダ遺跡やアムラ遺跡といった大規模遺跡において集約的な生産にあり、各小規模遺跡へ分配・流通していたことが確実に想定できる。しかし、IIC-D期では、下エジプト地域という一部の石材の供給地から遠隔にある地域で多量の石製品が出土する。続くIIIA-B期では、その下エジプト地域を中心とした大量生産化を認めることができる。このことに関しては、何らかの流通システムの変化を考えざるを得ない。そのため、次項では、本項で得られた石製品の地域分布の結果と、産地が特定されている泥岩製パレットを対象として考古学において一般的な交換研究の手法を用い、流通に関して諸分析を行う。

## 4. 石製品の流通に関する分析

続いて、泥岩製品を対象資料として、一般的な交換分析（原産地近郊遺跡からの距離と点数の相関性）を行った。考古学において交換や流通形態を分析する場合、素材の産地が判明している製品をその対象とすべきである。中でもパレットの石材である泥岩は、東部砂漠に位置するワディ・ハンマートにおいてのみ確認されており、化学分析の結果からも追証されている。且つ、泥岩製パレットは、全遺跡から安定して出土するということもあり、交換分析における統計的手法を援用しやすい。また、東部砂漠に位置する紅海丘陵やワディ・ハンマートに産地をもつ石材を用いた石製容器や石製腕輪、棍棒頭、球形製品、棒状製品といった石製品の分布状況も加味し、石製品の流通形態について分析を行った。

その結果、泥岩製パレットの分析からは、上エジプト地域内で見ると、それぞれの地域圏内のセンターを中心とする点数の多寡がIIA-B期に見られ、いわば遺跡階層（遺跡規模）に則した流通にあり、泥岩製品はナカダ・アビュドス両地域間で排他性を保持していた。上下エジプト地域間で見ると、IIC-D期にアビュド



ス地域を交易の中心地とした下エジプト指向型の流通への変容を読み取ることができた。下エジプト地域から極端に泥岩製パレットが出土するようになり、斑岩や蛇紋岩、泥岩を素材とした他の製品も同様であった。一方で、バダリ地域では、それらを素材とする製品が一貫して希薄であり、歯牙形製品もナカダ・アビュドス両地域間でほぼ固まる。IIIA-B 期になると、下エジプト地域のタルカン遺跡へ出土の中心が移行するため、原材自体が下エジプト地域へ大量に搬入された状況が窺える。また、当該期では、泥岩製品はナカダ地域からの出土は皆無であり、上エジプト地域ではアビュドス地域からしか出土が見られない。

## 5. 石製品の生産体制と流通システムの変遷

これまでの分析結果に基づき、本節では、石製品の生産と流通のあり方を総合的に検討し、時期ごとの変遷を考察する（図3）。

IC 期 石製容器は Ia 類と III 類を主体とする。III 類は、大半が硬質な石材である玄武岩を素材として製作された。先王朝時代を通じて石製容器の素材となった玄武岩は、化学分析によってファイユーム北部と周辺に位置する産地から採掘されたことがわかっている（Mallory-Greenough 1999）。近郊のマアディ遺跡で製作され II 類に属する石製容器は、おそらくマアディから上エジプトへの搬入によってもたらされたことが想定でき（Mallory-Greenough 2002）、グイヨーは当該期上エジプト出土の玄武岩製容器を下エジプトからの交換財として位置づけている（Guyot 2008）。翻って I 類は、エジプト・アラバスターまたは石灰岩といった軟質の石材に限定され、おそらくは遺跡の近郊、少なくとも上エジプト地域内で獲得可能な石材を用いていた。

Ia 類については、先行する新石器文化期の象牙製容器にその器形の系譜を求めることができるだろう（Arkell and Ucko 1965: 152, Adams 1988: 33）。なお、当該期の Ia 類の素材は石灰岩およびエジプト・アラバスターが独占的であり、色調・硬度ともに象牙のそれに求めた可能性が高い。このような石材選択と器形は、象牙製容器の製作技術をもって加工したことを示唆しているかもしれない。そのため、これらの器形や Ia 類については、在地生産品であると考えた方が妥当である。つまり、上下エジプト間で石製容器の生産センターは二極構造にあっただろう。ナカダ遺跡からバダリ地域にかけて Ia 類の出土量の多寡が地理的勾配を呈するため、上エジプト地域内では、ナカダ遺跡で集約的な生産とそこからの分配であった可能性にある。泥岩製品も地理的勾配に沿って

IIA-B 期 IC 期の器種構成とほぼ変動ない当該期についても、生産体制の二極構造的様相と 2 系統の石製容器を主体とする器種構成は継続する。一方で、ナカダ遺跡では III 類が出現する。この III 類は、明らかに上エジプト内部で生成された器形である。マアディで独占的に生産されていた II 類もこの時期からナカダ遺跡でトラバーチンを素材として在地生産化された。これらのことから、ナカダ地域において石製容器の生産はより活発になったと考えられる。また、流通システムは、ナカダ～アビュドス地域間で階層的な様相を呈する。それとともに、おそらく原材自体がアビュドス地域へ搬入されていた可能性が高い。これは、石製容器の Ic 類や泥岩製腕輪といった他地域では一切出土しない石製品類が認められることが傍証となる。おそらく、アビュドス地域内部でも、石製品を独立して生産する体制が整備され始めたと考えられる。

IIC-D 期 石製容器は、II 類から III 類へ器形は大きく変化する。この時期にマアディ遺跡は廃絶され、II 類を中心とした石製容器の生産拠点は消失する。上述したように III 類は上エジプト地域で発現した器形であるため、この時期から上エジプト地域における石製容器の生産規模は拡大し、マアディ遺跡の生産拠点の廃絶と並行して、独自の生産体制が確立したと言える。当該期から II 類の石材は、玄武岩からトラバーチンや石灰岩、角礫岩を主体とする石材構成に移行する。この II 類における石材選択の解体から上エジプト

地域内部でII類が在地生産化された可能性にあることが指摘でき、本地域で石製容器生産が中心化したと言えるだろう。また、III類はII類とは異なる系統であり、このようなIII類が主体となる様相は、IIA-B期よりもさらに発展した在地生産が行われていたことを示すだろう。III類の石材は角礫岩や斑岩といった東部砂漠の硬質な岩石を用いている。最も近郊のナカダ遺跡が、これらの石材の獲得および製品の生産の核地

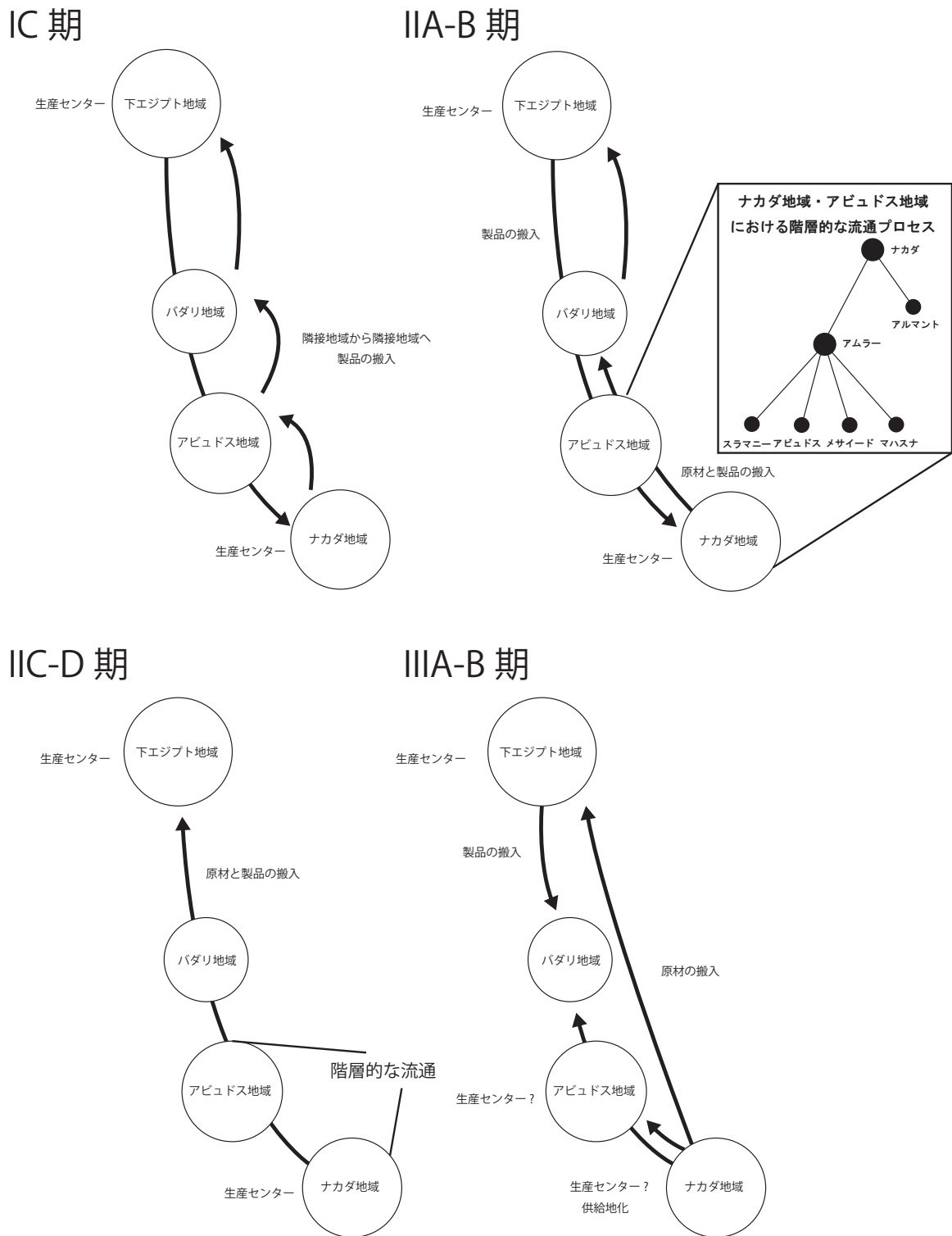


図3 石製品の生産と流通形態の変遷に関する概念図



域であったことは、本遺跡でこの時期を中心として棒状製品や球形製品が排他的に出土することが傍証となる。また、下エジプトでは、全体的な器種構成も明らかに III 類を主体とする上エジプト地域と共通する。一方で、斑岩製や泥岩製の VII 類や VIII 類、IX 類も器種構成に組み込まれる。おそらく、斑岩や泥岩については、原礫自体が下エジプト地域へ流通していたことが指摘できる。この下エジプト地域への石製容器の原材搬入は、泥岩製パレットの流通が下エジプト指向型のシステムへ移行することと機を同じくする。つまり、石製品や原材が上下エジプト地域間で流動化する様相を捉えられる。

IIIA-B 期 当該期になると、石製容器の生産拠点の様相はさらに複雑化し、下エジプト地域と中エジプト地域、上エジプト地域の三極的な構造が形成される。それとともに、石製容器および泥岩製パレットは大量生産され、とくに下エジプト地域において石製容器の需要は高まる。こうした石製品の大量生産と、上エジプト特有の石製歯牙形製品生産の消失は、密接に関連しているだろう。上エジプト地域では、生産と流通の縮小化とともに、下エジプト地域指向型の流通は加速化する。

下エジプト地域では、III 類がほぼ出土せず、VI 類・VIII 類・IX 類が中心的に出土しており、IIC-D 期以来の石製容器生産を引き続き確認できる。一方で、上エジプト地域では、III 類の伝統性を保持した石製容器生産が小規模ながら継続していたのだろう。ここで注視すべきことは、中エジプト地域が上下エジプト地域の中間的な器種構成となっていることである。つまり、中エジプト地域では独立して石製容器生産は行っておらず、上エジプト地域と下エジプト地域という生産拠点の両極から搬入された石製容器に依存していたと解釈できる。このことは、泥岩製パレットの分布状況からも推測することができる。つまり、大量の泥岩の原礫がおそらく下エジプトへ搬入されることから、流通経路上その中間地点であるバダリ地域を經由するため、必然的に当該地域には両極から情報あるいは物資の交錯があったと考えられる。上エジプト地域、とくにナカダ遺跡では泥岩製品の生産は小規模であり、原礫自体を搬出したのか、あるいは成品や未成品を搬出目的で加工して流通させたことが推測される。どちらにせよ、上エジプト地域は、IIC-D 期までの生産体制ではなく、供給地としての役割が中心的であったことが指摘できるだろう。

## 6. 石製品の動態と地域統合過程

では、以上のような石製品から見られた地域性は、土器や石器における地域性の既往研究とどのような対応関係にあるのだろうか。土器や石器は、各地域集団による自立的な生産体制にあり、ナカダ II 中期以降、上下エジプト地域間において土器や石器の地域的な多様性は収斂していくが、そのような変遷に沿わない。むしろ、石製品、とくに石製容器の地域差は上下エジプト間で広がる様相を捉えることができる。この地域差の広がり、石製品における集約的な生産体制と複雑な流通システムの発展に起因すると言ってよい。IIA-B 期のナカダ・アビュドス地域間の階層性に則した組織的流通の確立は、土器・石器分析で一般的に述べられているナカダ文化の核地域形成と並行する。そして、IIC-D 期になると、下エジプト地域も含め、ナイル川下流域全域の物質文化は均質的になる。文化的統合はこの時期の間に果たされ、石製品が地域間で流動化し、下エジプト地域指向の流通システムが形成される時期と合致する。つまり、ナイル川下流域全域で組織的な物流が確立されたことは、文化的な地域統合を刺激した要因の一つとして考えられる。

## 7. おわりに

修士論文では、広範囲にわたる分析結果を横断して結論づけようとしたため、細かなレベルにおいては精彩を欠いた考察になってしまった。しかしながら、石製品の分類と編年、そして分布状況といった基礎研究を更新できたことは一つの成果と言えよう。

生産地の欠落した当該期では、石製品の生産と流通の具体像を遺構からは求め得ない。遺物自体から生産と流通を考古学的に論じる際には、製作技術がいかに関地域間で共有され、あるいは排他的な選択にあったかを検討する必要がある。今回得られた知見をよりミクロなレベルで反復検証することが今後の課題となろう。

#### 引用文献

Adams, B. and Cialowicz, K. M.

1997 *Protodynastic Egypt*, London.

Arkell, A. J and Ucko, P. J.

1965 “Review of Predynastic Development in the Nile Valley”, *Current Anthropology* 6, pp. 145-166.

Guyot, F.

2008 “The Origins of Naqadan Expansion and the Interregional Exchange Mechanisms between Lower Nubia, Upper and Lower Egypt, the South Levant and North Syria during the First Half of the 4th Millennium”, in B. Midant-Reynes and Y. Tristant(eds.), *Egypt at Its Origins 2*, pp. 707-740, Belgium.

Hendrickx, S.

1996 “The Relative Chronology of the Naqada Culture: Problems and Possibilities”, in J. Spencer(ed.), *Aspects of Early Egypt*, pp. 36-69, London.

2006 “Predynastic-Early Dynastic Chronology”, in E. Hornang, R. Krauss, and D. A. Warburton(eds.), *Ancient Egyptian Chronology*, Leiden and Boston.

Hendricks, S. and Eyckerman, M

2011 “Tusks and Tags: Between the Hippopotamus and the Naqada Plant”, in B. Midant-Reynes and Y. Tristant(eds.), *Egypt at Its Origins 3*, pp. 497-570, Belgium.

Mallory-Greenough, L. M.

1999 “The Stone Source of Predynastic Basalt Vessels: Mineralogical Evidence for Quarries in Northern Egypt”, *The Journal of Archaeological Science* 26, pp. 1261-1272.

2002 “The Geographical, Spatial, and Temporal Distribution of Predynastic and First Dynasty Basalt Vessels”, *The Journal of Egyptian Archaeology* 88, pp. 67-93.

エジプト学研究 第21号

2015年3月31日発行

発行所 / 早稲田大学エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.21

Published date: 31 March 2015

Published by The Egyptological Society, Waseda University

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Institute of Egyptology, Waseda University